

大学院派遣研修報告書

所属校	東京都立大泉高等学校	氏名	佐藤健治
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻 学校教育コース
研究テーマ	英語教育における論理的思考能力発達の自己開示的研究		

I 研究の概要

1. 研究の目的・方法

本研究では、東京都立高等学校定時制課程での英語教育実践により、生徒の論理的思考能力がいかに関与するか、そしてその過程において生徒が何を獲得したかについて探ることを目的としている。研究方法としては統計的手法を用い、A 高校生の実践授業前と実践授業後の論理的思考能力の比較や、統制群と実験群における論理的思考能力の発達の比較から、大泉高校生の論理的思考能力が実践授業により発達しているということを検証する。また生徒が書いた作文等から、実践授業によって生徒が何を獲得したのか分析・考察する。

本研究においては、まず論理的思考能力とは何かということを確認する。次に、A 高校定時制（実験群）そして B 高校定時制（統制群）において 5 月に行われた作文実験の結果を分析し、論理的思考能力において 5 月の時点の両校に特徴的な違いが無いことを示す。続いて、A 高校で 1 学期に行われた実践授業について述べる。さらに 1 学期末に A 高校で行われたプレゼンテーション訓練の結果を検証する。そこでは 1 学期に実践授業を受けた 2 年生以上の生徒と、実践授業を受けていない 1 年生の生徒の比較から、実践授業が論理的思考能力の向上に関与していることを示す。続いて、2 学期に行われた実践授業について述べる。そして実践授業後の 10 月下旬に行われた作文実験で、A 高校生の論理的思考能力が 5 月と比較して発達していること、また A 高校生（実験群）の論理的思考能力が B 高校生（統制群）のそれよりも発達していることを示す。また英語や英語の授業とのかかわりについて、生徒が 11 月に書いた作文から、実践授業によって生徒が何を獲得したのか分析する。そして一人の生徒の事例に焦点を当て、実践授業がどのように生徒の意識や行動の変化に影響を及ぼしたのか、自己開示の分析項目をもとに分析・考察する。最後に、論理的思考能力を発達させる要因や今後の課題、そして論理的思考能力を発達させ自己開示を促す授業の可能性について述べる。

2. 研究の内容

2.1 論理的思考能力の定義

論理的思考能力の大きな要素として因果関係能力がある。本研究において論理的思考能力という言葉は、因果関係を説明する力とする。この因果関係を説明する力は英語を使いこなす上で非常に重要である。なぜなら英語は因果関係を説明することがその叙述スタイルになっているからである。因果律が英語の叙述スタイルであり、英語を使うときには因果律型の叙述スタイルにのっとることが必要である。論理的思考能力を付ける、すなわち因果関係を

説明する力を付けることによって、英語を英語の叙述スタイルで使えるようになる。

ここで決して間違えてはいけないのが、英語が論理的な言語であり日本語は非論理的な言語ととらえることである。また論理的な英語は非論理的な日本語より優れているというとらえ方をすることである。言語にはその言語特有の論理構造がある。言語はそれぞれ違った論理構造をもって存在しているのである。言語の論理構造に違いはあっても優劣はない。英語は因果律型の論理構造をもっているし、日本語は時系列型の論理構造をもっている。英語の論理構造と日本語の論理構造には優劣は無い。違いがあるだけである。

2.2 5月作文実験

4コマ漫画を日本人の小学生とアメリカ人の小学生に叙述させた渡辺雅子氏の実験では、日本人とアメリカ人では明らかに叙述の順番が違っていた。この「叙述の順番」の違いは日本語と英語の論理の違いを示している。作文実験の結果、A高校とB高校では5月の時点では作文タイプにほとんど特徴的な違いが無いことがわかった。

2.3 1学期にA高校で行われた授業実践

自分の意見と他の人の意見をやりとりしていく英語チェーンレターを行う。その際、論理的思考能力をつけるために、自分の主張とその理由を必ず述べる。

2.4 プレゼンテーション訓練

1学期末に欠席者を除く全校生徒が一堂に集まり日本語でプレゼンテーション訓練を行った。あるトピックにつき自分の意見を書き、それに対して他の人が意見を書くというものである。1学期に実践授業で英語で行ったことの日本語版であった。ただしこのプレゼンテーション訓練では話題は教員側から提示した。皆が知り合いの普段のクラスの英語の授業と違い、普段話したことがない1年生から4年生が一緒に取り組んでいくので、話題があまり個人的なものになるといけないと思い、教員側で話題を選んだ。

プレゼンテーション訓練では生徒の論理的思考能力を高めることが目的であった。また、1学期に私が授業実践を行った2年生以上と私が授業実践を行わなかった1年生の比較を通して、実践授業が論理的思考能力の向上につながったということを検証していった。

検証の結果、サンプル数が少ない中でのことなので、参考という形ではあるが実践授業が論理的思考能力の向上に結びついたのではないかと示すこととなった。

2.5 2学期にA高校で行われた授業実践

1学期に行った実践授業と同様、論理的思考能力を付けるために、生徒が自分の主張とその理由を述べる実践授業を行う。9月初旬から10月中旬まで実践授業を行う。1回の授業でひとつの課題をやりきる形にする。

2.6 10月作文実験

10月の下旬にA高校定時制とB高校定時制において作文実験を行う。実験は5月と同様、主人公の1日を描いた4コマ漫画を見て、その主人公の1日について書くというものである。10月に作文実験を行う目的は、5月にA高校とB高校で行った作文実験の結果を10月の作文実験の結果と比較して、A高校の生徒の論理的思考能力が10月に伸びているということを検証するためである。検証の結果、10月の時点でA高校において、明らかに論理的思考能力が伸び、統計上も有意な差が確認された。

2.7 11月生徒作文

これまでの生徒の英語とのかかわりや佐藤の実践授業によって生徒が何を得たのか、それを生徒が書いた作文や言動を分析することで明らかにした。

2.7.1 分析方法

これまでの英語と自分のかかわり、これまで受けてきた英語の授業、そして佐藤の実践授業に対する考えを86人の生徒の感想より分析した。その際、生徒の作文の内容を6つの観点から分析した。すなわち、目的観、方法・意識、対人的要素、経済的要素、環境要素、希望・期待の6つの観点である。生徒の作文の中で言及があったものについてチェックしていった。現在肯定的なものに対して○を、否定的なものに対して×を、中立的なものに対して△とした。佐藤の実践授業を受ける前は否定的であったものが、実践授業後に肯定的に変化した場合は、○↑とした。逆は×↓である。

2.7.2 分析結果

目的観と方法・意識を軸として分類した結果、生徒の作文は次の5タイプに分類された。

Pタイプ・・・方法・意識が○の生徒である。現在の授業の方法に対して肯定感をもって、意識も前向きである。

Mタイプ・・・目的観が×の生徒である。方法・意識は△か×が多い。現在の授業に対して効果はあると思いつつ、まだ過去の授業体験や常識が影響がある。はっきりした肯定感や要望をもてずにいることである。この点が次のSタイプと違う。

Sタイプ・・・方法・意識が△の生徒である。特徴は方法・意識が現在の授業方法に対して肯定的な面もあるが、同時にはっきりとした要望も抱えていることである。この点がMタイプとは違っている。

Nタイプ・・・目的観が○、方法・意識が×の生徒である。すなわち特徴は、目的観がはっきりしていて、それと現在の授業方法は合わないとな否定的な意識を抱いている生徒である。

他・・・分析するには作文の量が少なすぎると判断した生徒が2名いた。「英語は得意な方だからがんばる」と書いた生徒が一人。もう一人は、現在について何も書かれていなく、中学時代の対人的要素で英語の授業がとても嫌いになったとした生徒である。

分析結果 (生徒総数86名)

Pタイプ	・・・	68人	(79%)
Mタイプ	・・・	5人	(6%)
Sタイプ	・・・	9人	(11%)
Nタイプ	・・・	2人	(2%)
他	・・・	2人	(2%)
		合計86人	(計100%)

2.8 事例分析

生徒の作文、言動をもとに、実践授業がどのように生徒の意識に変化を及ぼしたか、自己開示についての各項目に沿って分析・考察した。個別の事例を分析するに当たっては自己開示について研究を行っている榎本博明の見解を参考にした。

本研究における自己開示の意義は、榎本の自己開示の意義の中から「自己への洞察を深める」、そして「胸にたまった情動を発散する」、また「親密な人間関係を促進する」の3つとした。

実践授業では、自分の意見を表明しその根拠を挙げることを生徒に行わせている。これに

より生徒が自分の考えや自分自身を表現し、そこでは自己開示が行われる。生徒がどのように自分を表現し、自己開示を行っているかを上記3つの項目に沿って分析・考察した。

2.9 論理的能力をつける要因

5月と11月にA高校とB高校で行った作文実験の結果は、自分の意見とその理由を述べる訓練を繰り返し行ったA高校の生徒が、論理的思考能力を高めたことを示した。

A高校の授業実践では、日本人の高校生が因果律の叙述スタイルを訓練によって使いこなせるようになる可能性があることを示すことができた。

3. 研究の成果

実践授業の中では、論理的思考能力を身に付けることを目的としながら自己開示を促す要素を授業に取り入れた。その結果、生徒は自己開示を行うなか、胸にたまった情動を発散し、自己への洞察を深め、他者との間に親密な人間関係を築いていった。そして生徒は論理的思考能力を見に付けていった。

自分自身の考えとその理由を述べる訓練の繰り返しが論理的思考能力を高め、自己開示を促したわけであるが、英語では自分自身の意見を表明するということはとても重要なことである。

英語や、中津療子氏の提唱する「外国語に移行可能な程度に最小限整理された日本語」である「中間日本語」では、人の意見を借りないで自分自身の意見を表明する。従来の日本の英語教育では自分自身の意見を表明することこそが重要であるという認識は薄かった。授業では正解を効率良く多量にインプットし、そしてテストではそれを正確に書くといったことが重視されていた。授業で自分自身の意見を表明したり他の人とやりとりをするということは少なかった。

A高校で実践授業を受けた生徒たちは、自分自身の意見を表明する自己表現・自己開示を行った。生徒たちは「胸にたまった情動が発散される」という経験を通して自己表現・自己開示の喜びを知り、それがさらなる自己表現・自己開示の欲求につながった。自己開示により「親密な人間関係」が促進されたことでコミュニケーション活動への動機が高まり、それはさらなるコミュニケーションへの欲求となった。他の人とのやりとりをする中でコミュニケーション能力も向上していくということが生まれた。またA高校で実践授業を受けた生徒は論理的思考能力という自分を表現するスキルを身に付けた。

本研究ではA高校定時制で行われた、論理的思考能力を高め、自己開示を促す実践授業について分析・考察を行った。作文実験、英語や英語の授業と自分のかかわりについて生徒が書いた作文、生徒の言動等を分析・考察した結果、多くの成果があったことが検証された。

II 学校等における研修成果の活用計画（授業活用・研修会計画など具体的に記入）

今後、大学院で開発・実践・分析した教材をさらに改善し、勤務校においてより良い授業実践を行っていききたい。また大学院派遣で得た研修成果を勤務校や東京都の研修会等で発表し、東京都全体の教育に研修成果を還元していききたい。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	大泉高等学校	氏名	佐藤 健治
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・学校教育コース
研修主題	英語教育における論理的思考能力発達の自己開示的研究		
1 所属校での成果活用	<p>・研究でその効果を裏付けられた、論理的思考能力を高め自己開示を促す授業を行った。その結果、授業を受けた生徒たちは、自己表現・自己開示を行うようになった。生徒たちは「胸にたまった情動が発散される」という経験を通して自己表現・自己開示の喜びを知り、それがさらなる自己表現や自己開示の欲求につながった。自己開示により「親密な人間関係」が促進されたことでコミュニケーション活動への動機が高まり、それはさらなるコミュニケーションへの欲求となった。他の人とのやりとりをする中でコミュニケーション能力も向上していくということが生まれた。授業の中で繰り返し自分自身の考えとその理由を述べるという訓練を受けたため、生徒は論理的思考能力を伸ばした。自己表現欲求が高まった生徒、論理的思考能力が高まった生徒に対して、さらに自分の考えや感情を英語で表現できるよう、日本語で考えた発想を文レベルで英文に変えていく訓練や生徒が自分にとって必要と考える語彙力のセルフチェックと必要と考える語彙力の増強にも現在、授業で取り組んでいる。そしてその成果は授業業公開等にて発表し、校内研修の充実に貢献した。</p>		
2 委員会 研修会での成果活用	<p>・東京学芸大学教育学科の教育学年報第25号において、大学院派遣期間中の授業実践とその成果、そして今後の課題を発表した。論文の内容としては、様々な題材に関して自分自身の考えとその理由を述べるという大泉高校の実践授業が生徒の論理的思考能力を高めたこと、また生徒は実践授業の中で自己表現・自己開示を行いながら、胸にたまった感情を開放しコミュニケーションすることの喜びを知ったこと、そして生徒同士や教員との親密な人間関係も促進されたということを検証したものである。生徒の論理的思考能力の向上については実験群の大泉高校と統制群の高校で行った5月と11月の作文実験の結果を比較検討し検証した。また実践授業が生徒の自己表現・自己開示を促したことについては、英語や英語の授業と自分の関わりについて生徒が書いた作文や生徒の言動等を分析・考察して検証した。また大泉高校での実践授業の今後の課題として、その成果が普遍的妥当性を持つかということについてもっと大規模に検証することの必要性を述べた。また実践授業に足りなかったことや実践授業にこれから加えていかなければいけないことについても論じた。教育学年報に記載された本論文は教育関係者から高い評価を受けた。</p>		

<p>3</p> <p>成果を活かした研究授業等</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平成18年度東京都公立学校英語教員集中研修において模擬授業を行い、自己開示を促し論理的思考能力を伸ばすノウハウを他校の先生方に披露し、その普及に貢献した。その内容としては、研修最終日に行われた模擬授業において、「もし無人島に何かひとつものを持っていけるとしたら、あなたは何を持っていきますか？」とい論題を設定しグループワークを行った。これは大泉高校で行う授業と内容的に同一のものである。研修に参加した先生達には、自分が持って行くものと、なぜそれを持っていくのかということを書いてもらった。そしてその後グループ内で何を持っていくのが良いかというディベートを行ってもらった。ディベート終了後、各グループの話し合いの内容を各グループ代表者を中心にクラス全体に発表をしてもらい、授業についてのシェアを全員で行った。模擬授業に参加した先生方は、授業の一連の流れを体感する中、「論理的思考能力を高め、自己表現・自己開示を促す授業」のポイントをつかむことができた。この模擬授業は、参加した教員や講師から大変好評であった。
<p>4</p> <p>今後の活用計画等</p>	<ul style="list-style-type: none"> 研修で得た成果は、まず授業や勤務校の校内研修において還元してきた。さらに他校の先生に対しては模擬授業という形でその内容を伝え、また論文も発表してきた。今後も発表機会をみつけ、研修成果をたくさんの先生方と広く分かち合っていきたい。そして、私の授業実践に対する他の先生方の意見、あるいは他の先生方の授業実践、そして最新の研究の知見等を参考にしながら、「論理的思考能力を高め、自己表現・自己開示を促す授業」の改良・発展を図っていきたい。